

三一新書 503

シャドウマン/夜の回路

邦 光 史 郎 著



三 一 書

邦 光 史 郎
くに みつ し ろう

1922年 東京に生まれる
高輪学園出身
戦時中「新作家」同人
戦後「文学地帯」を主宰
十五日会に属し「文学者」同人、「京都文学」同人を経る

著 書 『社外極秘』(三一新書)『色彩作戦』(三一新書)
『欲望の媒体』(三一新書)『負けるが勝ち』全三部(三一新書)『泥の勲章』(講談社)『仮面の商標』(ポケット文春)『重役紹介会社』(三一新書)『鉛の箱』(カッパノベルス) 他

現住所 京都市左京区北白川伊織町 25-1

夜の回路／シャドウマン

定価 280 円

1965 年 12 月 16 日 第 1 版発行

著 者 © 邦 光 史 郎
1965 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 同興印刷株式会社

製 本 所 本問製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9
電 話 東 京 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番
振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 503

夜 の 回 路

シャドウマン

邦 光 史 郎 著

三 一 書 房

シャドウマン／夜の回路 目次

第一章	バンコックの日本人	5
第二章	泥に浮かぶ顔	35
第三章	遁走路	63
第四章	弱い雄鶏	89
第五章	ルート	119
第六章	人喰鯨	161
第七章	黄金の肌	197
第八章	東京の地下室	225
終章	許されざる者	249

第一章 バンコクの日本人



窓の下に空地があった。たぶん何かの建物をこわした跡なのだろう、煉瓦の山があちこちに残っている。その空地で男がふたり立話をしていた。

眉と眼のあいだが迫り、膚の浅黒いタイ人なのだ。

山上英夫は、その様子を眺めながら髭を剃った。乾電池式の電気剃刀なので、よそ見していても髭が剃れた。

サロン風の長いスカートを巻きつけた女がひとり、男たちのかたわらに近よってきた。タイの女性は、どんなに細っそりとやせていても、例外なく胸と腰がよく張っている。

一体に東南アジアの女性たちは、中国人も含めて、脚が細く、スタイルがよい。まるで足長蜂のようにスマートだと、山上は思った。

サロンを着た女は、男たちを促して空地を出て行った。

こわれた石塀の向うに厚ぼったい葉をいっぱい茂らせた樹木がならんでいて、その下かげから薄い炊煙が立ち昇っていた。

そこに一組の夫婦とその家族たちの生活がある。

たとえ人種は異ろうと、人間の生活に大した変りはない。

彼は、バンコックへきてからもう五日たっていると思った。あと十日、いや半月は滞在していなくてはなるまい。そうしなければ仕事が終わらないのだ。

小うるさい蛇の羽音のように、電気剃刀のモーターがうなりつづけていた。

もう七時をすぎた。急がなくてはならない。

半袖シャツのボタンをとめながら、こちらへきてから買った鰐皮の時計バンドを左手首にまきつけた。鰐皮と銀器とジルコンがバンコックでは安いというが、あまり技術の発達しない国なので、どれも細工が粗末だった。それに、チリ紙でさえ自国で生産していないとみえ、輸入に頼っている有様だから、物価は高かった。

安いのは、あり余った太陽と自生する果物とおんなたちかもしれない。

彼は、あの袋状になったサロンをベッドに敷いて浅黒い肌をよこたえていたタイ女性の記憶をまさぐった。

七時十二分になった。もう出かけなくてはならない。朝食をとっているひまはないのだ。金を胸ポケットに入れておくのはやめた方がいいですよ。

そう注意してくれたバンコック駐在の有本の言葉が蘇ってきたが、今日は水 フー・ア・ン・ゲ・マ・ン・ゲ・ン 上市場の見物だから、そう気にすることもあるまいと、スーツ・ケースの中にしまっている財布から、二十バーツ紙幣十枚と十バーツ、五バーツを取りまぜて、三百バーツほど、ポケットに入れた。

一バーツが約十八円なのである。

ホテルの従業員も信用できにくい気がして、スーツ・ケースには鍵をかけた。

タクシーで五分とはかかるまい。充分約束の七時三十分には間に合うだろうと部屋を出た。

各階のエレベーター前にルーム・ボーイのカウンターが設けられていて、白い制服をきたボーイが、「グッド・モーニング」

と声をかけた。

答えながら、エレベーターのボタンをおしていると、ボーイがすり寄ってきた。

彼の顔をみるたびに、しつこく女はいらないかとすすめてくるボーイだった。

よほど女に飢えた顔にみえるのだろうか、そのたびごとに苦笑させられた。

「ブレーク・ファスト？」

のっぺりした感じの顔たちで、日本人によく似ていた。

「ノウ」

これから水上マーケットの見物に行くところだと答えると、そのボーイは、探るような微笑を頬に貼りつけたまま、また女はいらぬかとすすめた。

昼間だけ客をとる女たちの家があるというのだ。

「ノウ サンキュー」

手をふりながら、とまったエレベーターにとび込むと、ボーイもついてきた。

こんどはタイ式のトルコ風呂はどうだと、上眼づかいに探るような顔をすり寄せてくるのであった。

「ノウ サンキュー」

下手な物真似鳥のように、首をふりつづけたが、相手は一向にひるまない。

何しろ、女をすすめれば、客からチップがもらえ、その上、女の方からもリベートが入ってくるのであるから、ボーイは執拗である。

そのために、三分ばかり余計な時間を費してしまった。

しかも、ホテルの玄関口にいつもたむろしているタクシーの姿がその朝は見当らなくてまごついた。

ちょうど筋向いにあるホテル・ラマの前には駐車しているくせに、手を挙げて合図しても、一向にやってくる気配がない。

あきらめて、シロム通りを歩きはじめた。

彼の泊っているホテル・ビクトリーから、船着場のあるホテル・オリエンタルまでは歩いて約五、六分の距離であった。

だから充分間に合うはずだと思ったが、ひとりでに小走りになっていた。

年間の平均気温が二十九度もあるこのタイ国では、道を走ったりせかせか歩く者など一人もいなかったのである。

それに、タイ時間はひどく大まかで、約束より三十分や四十分遅れることは、むしろ当然とされていた。けれど日本人らしく律義者の山上は、気になってならない。

それに今日の水上市場フレイテングアンマーケットコースのツアーを案内してくれるガイドは、日本女性だというではないか。

あまり待たせては気の毒だ。彼は、小走りに、がらんとしたシロム通りを急いだ。

サムロと呼んでいる輪タクがすり寄ってきたが、その色褪せた幌と薄汚いシートを見ただけで、乗る気はしなかった。

バンコック市民の足といえ、このサムロと、子象のように丸くてずんぐりした旧式のバスとであるが、どちらも日本人は敬遠していた。

本国でもらう給料の三倍から五倍にも及ぶ高額の駐在手当をもらっている日本人商社員は、欧米人と同程度の生活状態なので、専ら自家用車かタクシーを利用していたのである。

それに走っているタクシーの八〇％は日本製の小型車だったから、なじみ深かった。

いきなり目の前にコロナがとまった。

歩いてもたかが知れていると思ったが、いまから汗をかきたくもなかったので、乗ることにした。

「ホテル・オリエンタル。ハウ マッチ？」

バンコックのタクシーは乗る前に値段の交渉をしなくてはならないのだ。

「テン バーツ」

いつも五バーツで行く距離なのに、運転手は平然と倍の値段を吹きつけてきた。

「ノウ ファイブ バーツ」

タイには、タクシー会社などなくて、運転手は車の持主から一日いくらと値をきめて借りているのだ。だから、客にサービスしようという気持など全くなかった。

「アイ ドント ノウ」

そう言えば、客の方で交渉をあきらめるだろうという顔つきで顎をしゃくっていた。

「ファイブ バーツ」

喧嘩腰でにらみつけると、しぶしぶ相手はOKとつぶやいた。

運転手というよりも雲助といった方がよいかもしれない。

この間にフィルムを詰め替えて置こうとハーフ・サイズのカメラの日盛りを読むと、まだ十枚ほど残っていた。

山上英夫は、ニュー・ロードを、メナム川寄りに入ったところにそびえ建っているホテル・オリエンタルの建物を目の前にして、なんとなく不安を覚えた。

真っ赤な制服を着込み、白いターバンを頭に巻きつけたインド人のドア・マンが、タクシーのドアをあ

けようとして、大股に近よってきたからかもしれない。

その黒く大きな手が、いきなり自分の首に伸びてくるのではあるまいかと思った。底光りする大きな眼が、彼をいつまでもみつめていた。

その眼に彼は異国を感じた。いま自分を取り囲んでいるのは意志の通じない異邦人ばかりだと気づいたのだ。

しかし、インド人が待ち望んでいたのは、単なるチップであった。

たった二バーツのチップをその掌に握らせると、インド人は、深々と頭を垂れて大きな声を張り上げた。
「サンキュー　サー」

2

「ハブ　ユウ　リザベイション？（予約しているのか）」

膚の浅黒いガイド風の男がすり寄ってきた。多分、水上市場見物の客を探しているのだろう。

「ノウサンキュー」

タイ人の執拗さには懲りていたのだ。

できるだけふり返らないようにして、正面玄関から、まっすぐ中庭へ進むと、朱塗りの反橋そりがかかっていた。

日本風の庭園を真似たつもりなのだろう。噴水のある池のほとりに石燈籠が添えてあった。中庭を横切ると、ショッピング・アーケイドになっていたが、まだ、早朝なので店はしまっていた。

ホテル・オリエンタルの裏側は広い芝生の庭がメナム川の岸までつづいていて、左手にプールが設けられている。

川岸に沿って、椅子とテーブルが配置され、野外のパーラーになっていた。

その籐椅子の一つに、日本女性らしい小肥りの中年婦人が腰かけていたが、表情は濃いサングラスのかげに隠されてよくは分らない。

「失礼ですが、山上さんでいらっしゃいますか」

いきなり、その人は歯切れのよい標準語で話しかけてきた。

危うくイエスと答えかけて、すぐ言い直した。

「ええ、山上ですが、佐伯さんでいらっしゃいますか？ アイ・ビー・トラベラーズの……」

昨日、電話でツアーを中込んだ時、アイ・ビー・トラベラーズのクラークが、佐伯という女の方がお伴しますからと言っていたのを思い出したのだ。

バンコクの日本語ガイドには、日本婦人が多かった。

それには理由があつて、彼女たちの大部分は、日本へ留学してきたタイ人の軍人や官吏たちと結婚している者が多く、日本へ留学してくる位だから、タイでは裕福な家庭の子弟なのだろうと思い、またタイ人も、彼女たちにそう思い込ませていたのであるが、さて、良人と共にバンコクへきてみると、予想に反して良人の生活は貧しく、共稼ぎしないことには、とても文化的な生活が維持できないからであった。

ふつうタイ国の官吏は子供が二人ほどある位の年齢でも、月給はわずかに一万八千円程度だといわれている。

むしろ現地人なみの生活をする気なら、その収入でも結構暮せないことはなかったが、つい彼女たちは

東京の生活と引き較べてしまうのだ。

その上、悪いことに、バンコックに駐在している日本人商社員の生活程度は現地人とは比較にならない程高く、欧米人の生活と全く変りなかった。

月に六、七万円も家賃をとられるような高級住宅地に、ガレージ付の邸宅を借り、メイドを二人も備つてお抱え運転手付きの自家用車を乗り回している支店長クラスの夫人連を目にするたびに、タイ人と結婚した日本女性たちは、胸の底からむかむかしてくるような妬ましさに駆り立てられた。

そしてこれ以上自分をみじめにしないために、手っ取り早い日本語ガイドを志願するのである。

企業というものの発達していかないタイ国では、日本のようなサラリーマン階層が至ってすくなく、女が収入を得ようと思えば、客に媚びを売る水商売か女店員をするより他に途がなかった。

ところが、熱帯のために成熟の早いタイ国では、三十歳になった女は、中年どころか、下手をすると婆さん扱いされかねない。

それだけ一般に短命なのだ。

その上、商業はすべて華僑の手に握られ、政治的には軍政を布いているが、事實はアメリカ軍の基地に他ならない。

国全体が基地の街なのだ。

ホテルの大部分は観光客専用であり、アメリカ軍専用の物もすくなくはない。

たとえ読み書きできなくとも、片言英語がしゃべれなくては、靴磨き一つできない国なのだ。

米と、もうこしと砂糖ぐらいが主な産物で、これといった近代工業がすこしも育たないのは、近代技術を受け容れるべき教育の普及が足りないためだろう。

アメリカに軍事基地を提供し、兵隊とその家族が落すドルを期待し、観光と女で稼ごうという国なのだ。そうしたアジアの植民地性が、腹立しいよりもむしろ山上には悲しかった。

こんな国へ、なぜこの人は嫁いでくる気になったのだろうと、山上は、眼の前に佇んでいる三十歳あまりの日本女性に問いかけたくてうずうずした。

けれど、流行遅れのスーツに、野暮ったい黒靴をはいた相手は、取り澄した声で答えた。

「私、アイ・ビー・トラベラーズの佐伯でございます」

含み綿でもしているように厚ぼったい頬に微笑をたたえていた。

山上は慇懃な態度で応じた。

「どうも今朝は遅刻してしまって申訳ありません」

「いいえ、とんでもありません。じゃ、船が待っておりますので、参りましょうか」

「は。どうぞ」

ならんで船着場の方へ向うと、満々と濁水をたたえたメナム川の広い河幅のあちこちから、けたたましいエンジンの響きが流れてきた。

水上市場を見物にでかける観光客のために、毎朝四十隻あまりの小型遊覧船が集ってくるのだ。

「それから、お断り申しておきますが、あなたの他に、二人ほど御一緒する方がございます」

そう告げた時、なんとなく佐伯夫人の声に、かげりが感じられた。

「アメリカ人ですか」

白人といっしょではたまらないなと思った。

何しろ、白人は、どこへ行っても我物顔にふるまっているのだ。

そのくせ、アジア各地の政府当局者は、アジア人にはきびしく、白人には卑屈なほどの優遇を与えている。

だから、アジア人を黄色い土人と考える白人たちによって、ヴェトナムの悲劇が起こり、彼ら白人はアジア人の生命が喪われることに対して、さしたる罪の意識をもたなくなったのだろう。

何がキリスト教精神でありデモクラシイだと、その偽善ぶりに、時として山上は腹を立てた。

そういう白人たちと同席すれば、必ず不快な思いをするにきまっていたのだ。

しかも、それがヴェトナム戦線から遊びにきているGIか何かだったら、これ以上厭な相手はないと、二の足をふんだのである。

「いいえ、アジアの方ですわ」

日本の、とは言わなかったところをみると、中国人なのだろうか。

しかし、香港や台湾の中国人たちが入国することを、あまりタイ国では歓迎していないから、マレーシア人かもしれないと思った。

むろん、現在仲のわるいカンボジャ人やビルマの旅行者が、このタイ国へやってくると思えないのだ。狭い船着場へやってくると、そこに十人乗りぐらいのエンジンつき遊覧船がつながれていた。

操縦しているタイ人の青年に、佐伯夫人は、何事かタイ語で命じた。

山上は、すでに乗り込んでいる二人の男たちにすばやい視線を送った。

「さあどうぞ」

佐伯夫人に声をかけられて、船べりをまたぐと、つづいて夫人も乗り込んできた。

「どうもお待たせいたしました」